

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770145

研究課題名(和文) 漢語北部吳方言におけるトーンクロックに関する実証的研究

研究課題名(英文) An empirical study on tone clock in Northern Wu Chinese

研究代表者

増田 正彦(MASUDA, MASAHIKO)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・研究員

研究者番号：40614053

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：漢語北部吳方言は、上海市、江蘇省南部、浙江省北部で話されている。北部吳方言の1つである無錫方言には、トーンクロックと呼ばれる特別なタイプのトーン交替が見られる。トーンクロックとは、例えばA型がB型に、B型がC型に、C型がA型に変化するというような交替のことである。本研究では、現地調査を行うことで、トーンクロックの仕組みを考察した。無錫の中心地域だけでなく、郊外地域においても調査を行った。

研究成果の概要(英文)：The Northern Wu Chinese dialect is spoken in Shanghai, the Southern Jiangsu province, and the Northern Zhejiang province. The Wuxi dialect, one of the Northern Wu dialects, is spoken with unique tonal alternations, that are called "tone clocks". For example, pattern A may change into pattern B, pattern B may change into pattern C, and pattern C may change into pattern A. This study examined the mechanism of the "tone clock" in Wuxi by conducting a field survey. The survey covered not only the central area of Wuxi, but also its surrounding areas.

研究分野：言語学

キーワード：中国語 吳方言 北部吳方言 無錫方言 トーン トーンサンディー パターン代入 トーンクロック

1. 研究開始当初の背景

漢語諸方言には、様々なタイプのトーンサンディー（トーンの交替、弱化、削除などの総称）現象が見られる。このうち、本研究に関わるのは呉方言と呼ばれる方言グループであり、主に中国上海市、江蘇省南部、浙江省で話されている（図1）。

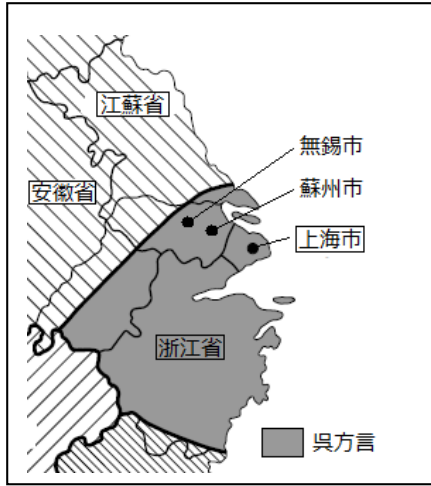


図1 呉方言の使用地域 (Yip 2002 を改変)

呉方言のうち本研究で中心的に扱うのは、北部呉方言と呼ばれる下位グループで、主に中国上海市、江蘇省南部、浙江省北部で話されている。北部呉方言では、多音節語において第2音節以降のトーンが削除され第1音節のトーンが語全体に拡張するというタイプのトーンサンディーが広く知られている。

このタイプとは別に、無錫方言や蘇州方言など北部呉方言の一部には多音節語の第1音節のトーンパターンが他のトーンパターンに交替する、パターン代入と呼ばれるタイプのトーンサンディーもある。こちらのトーンサンディーは主に複合語（主に偏正構造）に適用され、「動詞語幹+接辞」や「動詞語幹+代名詞」などの構造には適用されない。なお、削除・拡張はいずれの構造にも適用される。

・複合語の場合：

基底表示 代入 削除・拡張 表層表示

・「動詞語幹+接辞・代名詞」の場合：

基底表示 削除・拡張 表層表示

ここで、北部呉方言の下位方言である無錫方言のパターン代入は、A型がB型に、B型がC型に、C型がA型にというように交替し、一種のトーンクロックをなしている。例えば、頭子音が無声音の場合、図2の通り交替する。ここで、数字は音の高さを表し、5が最も高く、1が最も低い。

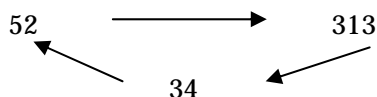


図2 無錫方言のトーンクロック

このような北部呉方言におけるトーンクロックは、これまで十分に研究されてきたとは言えず、その音韻論的な仕組みは明らかになっていない。

2. 研究の目的

無錫方言および近隣方言のトーンサンディーを中心に調査を行う。特にパターン代入タイプのものを中心に扱う。これらの調査を通して、北部呉方言におけるトーンクロックの特徴を明らかにすることを目的とする。

北部呉方言におけるトーンクロックの仕組みを解明することは、ピン南方言なども含めたトーンクロックの全容の解明につながる可能性がある。

3. 研究の方法

無錫方言のトーンパターンおよびトーンサンディーについて、体系的な記述を行う。データの収集に際して、日本国内で適当な人数の無錫方言話者を確保するのは困難であるので、現地調査を行う。

無錫市中心部の方言だけでなく、無錫市郊外（雪浪鎮、華莊鎮、旺莊鎮など）の方言についても記述を行う。郊外地域において調査を行う理由の1つは、調査地域を限れば、話者間の相違が少なく、言語の体系が見えやすいと思われるためである。中心部では、話者間でゆれが大きい可能性があり、同一の話者であってもゆれが見られる可能性が高い。もう1つの理由は、郊外地域の方言は都市化のさらなる進展によって今後急速に失われていく可能性が高いため、早急に記録しておくことが望まれている。

4. 研究成果

(1) 無錫方言の音韻体系や語彙など基本的な事柄について記述を行った。もちろん無錫方言についての記述的研究も増えては来ているが、上海方言や蘇州方言に比べると十分とは言えない。特に本研究では無錫市郊外（雪浪鎮、華莊鎮、旺莊鎮など）の方言も調査対象に含めている点に価値があるであろう。

(2) 無錫方言に現れる各トーンパターンの音韻論的な表示を明らかにするために、基本周波数 (F0) の推移を測定した。無錫方言には6つのトーンパターンがあると考えられる。すなわち、2音節語のパターンで言えば、44-21、31-14、33-44、12-41、24-21、32-24というパターンである。なお、1音節語の場合は、それぞれ52、313、34、213、131、213となり、2音節語における12-41と32-24はともに213と実現する。

調査語は1音節から4音節の語（句）である。1音節語としては動詞語幹を用いた。2音節以上の語としては、動詞語幹に代名詞や助詞などを付加して作成した語（句）を用い

た。

- ・ 1 音節 : V
- ・ 2 音節 : V 佻
- ・ 3 音節 : V 佻俚
- ・ 4 音節 : V 佻俚咧

V は単音節動詞語幹を表す。“佻” [dʌu] は<彼、彼女>、“佻俚” [dʌuli] は<彼ら、彼女ら>、“咧” [liə?] は、状況の変化を表す終助詞である。例えば、“帮” [pā] <助ける>を動詞語幹として、“帮”、“帮佻”、“帮佻俚”、“帮佻俚咧”などの語(句)について調査を行った。他に1音節名詞や2音節名詞などについても測定した。

F0の測定に際しては、単語を単独で発音した場合だけではなく、単語をフレームセンテンス中に配置した場合も測定した。こうすれば、発話の終端などに現れやすい境界トーンによる影響を排除することができる。例えば、名詞については“佻讲 N<sub>1</sub> V 葛是 N<sub>2</sub>” [dʌu kō N<sub>1</sub> V gə? zɪ N<sub>2</sub>] 「彼は、N<sub>1</sub>がVするのはN<sub>2</sub>だと言っている」というフレームセンテンスを用いた。

調査の結果、無錫市中心部においても郊外地域においても、下降調などに現れる末尾の低調は、文中においては現れにくいということがわかった。例えば、下降調が2音節語に現れる場合、単独で発音すると44-21となるが、文中においては44-44となることが多い。このことは、下降調というのは、基底では単なる高平調であるということを示唆している。他に24-21や12-41なども、文中では24-44や12-44と実現することがわかった。この結果は従来考えられてきた基底表示を再考する必要があることを示していると言える。

また、声門閉鎖音を末尾に持つ音節のうち、従来の研究では52とされているものについては、多音節語の調査の結果、基底では313であると考える方がよいことが明らかとなった。例えば、“接”<迎える>という音節は声門閉鎖音を末尾に持っているが、“接佻俚”の場合は31-11-13のように実現した。これは313が拡張したものと考えられる。

(3) トーンクロックが共時的な規則によって引き起こされているかどうかを明らかにするために2音節の無意味語を用いた調査を行った。本研究では、無意味語として、申請者によって作成された架空の外来語を刺激として用いた。架空の外来語を用いる理由は以下の通りである。漢字は、音韻ではなく、形態素に対応しているため、漢字を媒介にして無意味語の調査を行うのは一般的に難しい。しかし、漢字で表記された調査語でも、外来語として提示することで、漢字に対応する形態素本来の意味が削除されるので、無意味語による調査に近い状態を作ることができる。

調査語は、前部要素としては52、313、34のトーンパターンを持つ形態素を3つずつ選んだ。後部要素としては、各々の前部要素に対して、52、313、34のトーンパターンを持つ形態素を3つずつ選んだ(3×3×3=27)。なお、これらの形態素はすべて単独で語として用いることができるものである。また、これらの無意味語をどのトーンパターンで読んだとしても、同音の実在語は存在しない。

これらの無意味語は話者には外来語として提示し、“勒 X 读书是蛮好葛” [lə? X do? sɿ zɪ mɛ ho gə?] 「Xで勉強(留学)するのは素晴らしい」というフレームセンテンスに入れて読ませた。

調査した話者は無錫市中心部の若年層の話者9人である。(1981年~1988年生まれ。男4人、女5人。)各話者とも、上の無意味語を2度ずつ読ませた。

結果は表1の通りとなった。

	クロック状に交替	交替なし
基底で52	88.9% (144)	5.6% (9)
基底で313	91.4% (148)	6.2% (10)
基底で34	82.7% (134)	12.3% (20)

表1 トーンクロックの生産性

すなわち、基底のトーンパターンが52の場合、クロック状に交替した場合、すなわち313となった場合が88.9%であった。これに対して、基底の52がそのまま表層で現れた場合は5.6%であった。なお、残りの5.6%は他のトーンパターン(34など)に交替した場合である。基底が313と34の場合もクロック状に交替した場合、すなわち34と52となった場合がそれぞれ91.4%、82.7%となった。この表1の結果は、トーンクロックが何らかの規則によって引き起こされていると考えなければ説明が難しいであろう。

(4) 無錫市郊外(雪浪鎮、華莊鎮、旺莊鎮など)におけるトーンクロックの状況について中年層と高齢層を中心に調べた。華莊鎮では中年層、高齢層とも1000語程度調べた。雪浪鎮でも同規模の調査を行う予定であったが、話者の体調や世話人の都合などにより予定よりも調査規模が小さいものとなった。

結果は、無錫市中心部同様にトーンクロックが観察された。このことはトーンクロック現象が北部呉方言地域において一定の広がりを持っている可能性を示唆している。

(5) 無錫方言の前軽声について調査を行った。前軽声とは単音節語において生起するトーンサンディーであり、トーンパターンの中和を伴う。トーンの弱化の一種と考えられる。典型的には「単音節動詞+目的語」という構造で、単音節動詞の持つトーンパターン間で中和が起こる。

結果、無錫方言においては、52を除くすべ

でのトーンパターンが中和する場合があることが明らかとなった。すなわち、313、34、213、131 がすべて中和するということである。ただし、今回の調査では、話者数、調査語数ともに限られていたため、今後は話者数や調査語数を増やしてさらに調査を進める必要がある。

(6) 予備的調査ではあるが、パターン代入のドメインについて調べた。その結果、無錫方言では「動詞+目的語」という構造の場合は統語的な語の境界を越えてパターン代入が適用されてもよいことが明らかとなった。これに対して、蘇州方言では「動詞+目的語」という構造では基本的にドメインが分かれる。

例えば、「動詞-目的語」という構造を持つ“看书”<本を読む>の場合、蘇州方言ではパターン代入が適用されることはない、つまり、“看”と“書”の間にドメインの境界が現れるのが一般的である。すなわち、“看”と“書”は基底では412と44というトーンパターンを持っているが、表層でも同様のトーンパターンが現れる(ただし、この位置では412の末尾は十分に上昇せず、41と実現する)。このことはパターン代入が起こっていないことを示している。

これに対して、無錫方言では、同じ“看书”にパターン代入が適用されてもよい、つまり、“看”と“書”の間にドメインの境界が現れなくてもよい。すなわち、“看”と“書”は基底では34と52というトーンパターンを持っているが、表層では44-21という形でも許される。この表層形は、第1音節の34がパターン代入によって52となり、この52が全体に拡張した結果と考えることができる。

このように同じ北部吳方言、特に蘇州と無錫はともに北部吳方言内の蘇滬嘉小片に属する方言であっても、トーンサンディーのドメインの形成のされ方は大きく異なっている可能性があり、さらなる研究の必要性が明らかとなった。

なお、以上の研究成果について現在雑誌論文への投稿準備作業を行っている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

増田 正彦 (MASUDA, Masahiko)

九州大学・人文科学研究院・専門研究員

研究者番号: 40614053

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: